

## 張廷済と古甌の縁

川合尚子

- 一．はじめに
- 二．張廷済の家族と古甌研究
- 三．張廷済の交友―古甌の収集と研究に関わった人々―
- 四．『清儀閣所蔵古器物文』の内容について―序跋から―
- 五．古甌について
- 六．『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古甌）について  
―記載内容の分類―
- 八．おわりに

張廷済（一七六八―一八四八）は、清代の中期に活躍した、金石学者・書家である。文物の収集家としても有名である。張廷済は、幼少の頃から學問に励み、生涯を趣味や學問の世界に打ち込んだ。浙江省嘉興縣新篁里（現在は新篁鎮）の里正として、村の管理をし、自宅である清儀閣の隣に建てていた、太平寺の護持をしながら、文物収集、石碑の拓本採集を、兄弟や親戚一同で取り組んでいた。

交友も幅広く豊かな関係を築いており、翁方綱（一七三三―一八一八）、阮元（一七六四―一八四九）、その門人達や、地元の名士、學者に至るまで、時には、友人たちと文物談議に花を咲かせ、酒を酌み交わしたり、詩を詠み、題跋を書いたりして過ごしていた。彼は、文物とそれに関わる人々との墨縁を大切にし、その収集と鑑賞と研究に励んだ。今回は、『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古甌）を取り上げ、古甌を通しての彼の趣味、學問、交友関係はどのようなものであったかを考察する。

## 一．はじめに

張廷済（一七六八—一八四八）は、清代の中期に活躍した、金石学者・書家である。文物の収集家としても有名である。張廷済は、幼少の頃から学問に励み、郷試を受けて、解元となるが、中央政府の会試には、応じたが合格せず、官途に志を絶って、趣味や学問の世界に打ち込んだ。浙江省嘉興鼎新篁里（現在は新篁鎮）の里正として、村の管理をし、自宅である清儀閣の隣に建っていた、太平寺の護持をしながら、文物収集、石碑の拓本採集を、兄弟や親戚一同で取り組んでいた。

交友も幅広く豊かな関係を築いており、翁方綱（一七三三—一八一八）、阮元（一七六四—一八四九）、その門人達や、地元の名士、学者に至るまで、時には、友人たちと文物談議に花を咲かせ、酒を酌み交わしたり、詩を詠み、題跋を書いたりして過ごしていた。彼は、文物とそれに関わる人々との墨縁を大切にし、その収集と鑑賞と研究に励んだ。宋代以来の金石学は、ややもすれば固い血のかよわな考証に偏りがちであったが、単なる学問の対象であるのみならず、愛情に満ち溢れた趣味の領域へと展開していた。

今回は、『清儀閣所藏古器物文』第五冊（古甌）を取り

上げ、古甌を通しての彼の趣味、学問、交友関係はどのようなものであったかを考察する。

## 二．張廷済の家族と古甌研究

清代になり隆盛を極めた金石学は、翁方綱、阮元、そして張廷済へと受け継がれ、金石学を好んでいた張廷済は、自宅の清儀閣を建て、殷、周、秦、漢代の時代の青銅器、碑碣などから、清代の文房四宝に至るまでの文字史料の収集と研究に没頭した。その研究成果をまとめた著録に『清儀閣所藏古器物文』（全十冊）がある。こうした、金石学研究は、張廷済の家族ぐるみで行われていた。その影響を受け、彼は、金石学を楽しみとし、生涯を送ったのだろう。

また、清代の金石学の特徴の一つに、古甌研究がある。

古い家屋の煉瓦、屋根瓦、壁、敷石、石柱などに絵や文字が刻まれているものがあり、それを収集し、年代、場所、制作者などを研究することが盛んになった。また、収集した古甌を硯に加工し、文房具として珍重するという趣味も流行し、張廷済とその家族も古甌の収集と研究に没頭した。収集した古甌は、自宅である清儀閣に「八磚精舍」と名付けられた、古甌専用の収蔵庫が建てられ、そこに、収められた。『清儀閣所藏古器物文』第五冊の跋にも張廷済の家族の名前と古甌の入手経緯などが記されており、家族で古

輒の収集と研究がされたことが分かった。ここで、特に、張廷済と共に、古輒研究に携わってきた人物を見ていきたい。

張沈（一七六四—一八〇九 字は徳容。張廷済の兄。）

は、張廷済、張燕昌（一七四〇—一八一四）、徐澍（一七五七—一八三一）、徐同柏（一七七五—一八六〇）らと共に、古輒の収集と研究に励んだ。海塩の海には、秦代の故城が沈んでいて、干潮の時、その故城が現れる所があり、地元の漁師達は、この現象を「海現」と呼んでいた。その干潮の時、様々な古輒の収集ができた。このことを張沈は、よく張廷済に話し、共に、「海現」のある海岸に出かけ、地元の漁師達にも手伝ってもらい、古輒の収集を楽しんだ。『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古輒）の執筆時期には、張沈は、既に亡くなっていて、張廷済は、張沈と収集した古輒を眺めて、張沈と古輒の収集した時のことを懐かしんでいる。

張灝（一七六一—一八一三 字は逢源。号は蓬園。張廷済の従兄）は、母の顧氏に孝行し、才気に溢れ、張廷済と彼の父、張鎮と共に、新篁村の里正の公務に尽力した。金石を好み、張廷済と共に、文物の収集や嘉興内の石刻・瘞鶴銘の採拓を楽しんだ。張灝も、よく海塩の海岸や古い城壁のあるところに出かけ、古輒の収集に励んだ。海塩内で

古輒が手に入る場所に詳しく、鑑識眼も鋭かった。

張沈（一七七〇—一八四七 字は楚白。号は季勤。張廷済の弟）は、竹を画くに工みで、多く残した。張廷済と、古輒の収集にいそしみ、翁方綱や翁樹培（一七六四—？）とも交流が密で、古輒に銘を書してもらい、刻したものである。

張上林（生卒不詳 字は心石。号は又超。張廷済の侄）は、吟咏を楽しみ、画竹に工みで、金石篆刻を好んだ。古輒の収集や研究に熱心で、八磚精舎によく出入りし、張廷済と古輒談議に花を咲かせた。

張慶榮（一八二四—一八五四 字は大豫。号は稚春。張廷済の次男）は、道光二十六年（一八四六）の解元。父の影響を受け、金石学を嗜み、張廷済と共に、古輒の収集と研究に勤しんだ。

張晋燮（？—一八六〇 字は励柏。号は理伯。張慶榮の次子。張廷済の孫）は、向学心に篤く、祖父の張廷済を尊敬し、鴛湖書院に通い、研鑽しながら金石を好み、張廷済に付いて、古輒の考証に励んだ。

張邦枢（一七八五—一八二三 字は中之。号は子鶴。張廷済の侄）一九歳で嘉興県の学官弟子・廩生となった。『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古輒）中には、郷試のお祝いに、張廷済から、「晋成帝咸康六年輒」を贈られている

る。彼も、古甌収集と研究に篤かった。

徐樹（一七五七—一八三一）字は瀛州。号は溪南老屋。

張廷済の姐の夫）は、子は、徐同柏で、詩歌音韻に優れていた。張灝、張沆、張廷済、息子の徐同柏等と共に海塩内の古甌収集によく出掛け、彼らと共に、文物の考証に勤しんだ。

徐同柏（一七七五—一八六〇）字は寿蔵。号は籀庄。張廷済の甥）は、張廷済に指受され、六書篆籀を精研し、文物の文字・時代等の考証を得意とし、張廷済は、文物の考証は、主に彼に任せていた。また、張廷済は、文物の代金を徐同柏と出し合って購入し、文物を求めて様々な地域へ出掛ける時にも、徐同柏を同行させた。張廷済は、徐同柏をととても可愛がり、徐同柏も張廷済を尊敬し、学問であり趣味の金石学や古器物の収集、考証から生活の全てを共有していた。また、篆刻をよくし、張廷済の印は彼が刻したものが多い。張燕昌（一七四〇—一八一四）らとも交流し、残碑零碣・井欄橋柱・瓦当壘甌等の考証に取り組んだ。

張廷済の古甌研究は、こうした家族の協力で、古甌についての情報交換や史料収集を行い、考証することができた。収蔵品も時代ごとにそろえることができ、八磚精舎を建て、より研究に専念することができたのだった。

### 三．張廷済の交友

#### — 古甌の収集と研究に関わった人々 —

家族の他に、張廷済の金石学、古甌研究において、師でもあり研究仲間でもある人物達がいた。それは、前にも少し述べたが、翁方綱と阮元である。当時、金石学を研究するために、翁方綱と阮元のサロンに属し、そこで様々な情報交換、研究をする者が多くいた。張廷済もその一人で、古甌研究については、張廷済は、翁方綱と阮元に度々教わりに行ったり、入手した古甌を翁方綱と阮元に贈ったりとしていた。その中で、張燕昌、達受（一七九一—一八五八）にも出会い、共に研鑽するようになった。張廷済の交友関係は、多岐に渡り非常に豊かであったが、ここでは、張廷済の古甌研究に特に関わった人々として、『清儀閣所藏古器物文』第五冊にも載る、この二人を取り上げ、どのような人物であったかの略歴も加えつつ、張廷済と関わっていたのかを述べることにする。

翁方綱（一七三三—一八一八）字は正三。号は覃溪・蘇齋・復初齋。大興の人）は、乾隆壬申（乾隆一七年 一七五二年）の進士。官は、内閣學士にまで至った。金石・譜録・書画・詞章に造詣深く、詩をよくし、書法篆刻にすぐれていて、張廷済の金石学の師とも言うべき存在の人であ

った。『清儀閣所藏古器物文』第五冊には、張廷済が入手した古甌について翁方綱が調べたことを銘文にし、張廷済に贈っていたことが記されていた。

次に、阮元（一七六四—一八四九 儀徵の人。字は伯元。号は擘經老人。諡は文達）は、乾隆五十四年、進士となり、翰林院編修・内閣學士・戸部・礼部・兵部・工部らの侍郎に官し、体仁閣大學士・太子少保となり、更に大傳に進んだ。書は、篆隸楷行をよくした。交友・門下生が多く、著書、編纂書は甚だ多い。中でも、『南北書派論』『北碑南帖論』は、金石学者として、北碑を正統し、最も世に宣伝され、碑学の指導理論となった。また、浙、粵等省に滞在中には、詒經學堂と學海堂を設立した。また、あらゆる時代、種類の古甌の収集に励み、遂には、「八磚吟館」を建て、古甌を収蔵・鑑賞し、學問の弟子達や友人達を招いて、古甌について考証、鑑賞し、古甌を題材に詩を詠で楽しんだ。張廷済も、阮元の弟子として、八磚吟館に赴き、金石学の研究や文物を題材に詩文や書の創作に励んだ。張廷済が建てた「八磚精舍」の名は、「八磚吟館」にあやかっただのである。

これらの人物は、張廷済と交流が深く、金石の文字資料の研究や考察の意見交換を何度も繰り返した。張廷済は、この交流の中で、文物に関する知識や見方をより深めている。

った。また、収集した文物を分析するのに、多くの知恵を借った。

張廷済と翁方綱、阮元が、古甌研究に関わった具体的な内容については、後に考察する。

#### 四・『清儀閣所藏古器物文』の内容について

##### — 序跋から —

次に、『清儀閣所藏古器物文』の内容を見ていきたい。珍しい著書でもあるので、序跋を読むと、本書が、どのような目的で、どのような内容で編集されているのかが理解できるだろう。『清儀閣所藏古器物文』は、張廷済の亡くなった後、戦争や清儀閣の火災によって、散佚してしまったのを、褚德彝らによって、再び集められ、出版されたものである。張廷済以外の跋中でも新しいものがあるのはこのためである。序跋を書いているのは、すべて張廷済に親炙し、私淑した人々である。

本書の序文を書いた、褚德彝（同治十年—民国三十一年 一八七一—一九四二）は、浙江余杭（今の杭州）の人。原名は德儀、名を德彝と改めた。字は松窗、守隅、号は礼堂、里堂、公礼、縮遺、漢威、又の号は竹尊宦、舟枕山民、松窗逸人。室名は角茶軒。金石の考証に精しく、尤も篆刻に巧みで、初めは浙派を手本とし、後、秦漢璽印を潜研した。

また、梅を描くことを能くした。著には、『金石学録統補』『竹人読録』『松窗遺印』等がある。『清儀閣所藏古器物文』の中にも、度々跋や題字を添えている。また、張廷済の遺印を集め、『清儀閣藏名人遺印』を著した。張廷済に私淑した一人である。

この序は、甲子（民国十三年 一九二四）の春三月に書いたものである。ここでは、釈文と訳ともに考察も加えることにする。



#### 〈釈文〉

集古器物文字、昉於天水嘯堂、雅好文字、足繼歐薛、復齋集冊款識通搜、畢趙好竺知真日、積月累考證、伝甄華芬芸圃滋可遺也。乾嘉以來、茲学大顯、經師学子共相鑽、仰畢阮權輿於前、吳陳企踵於後、嘉興張叔未解元酷好金石学、問学既精、收儲尤富、因集三代至國朝器物款識都為十冊。凡文字同異、藏去源流、莫不考據精詳、自為跋尾、誠書苑之青華、古林之鴻宝也。

今距解元之物、又將百年。戰火婁更、圖書散佚、訪之好古家、咸以未見此冊為憾。晚霞先生羅致古籍甚富、於滬市得此十冊、出以相賞。墨華照映、古香襲人。顧數經軋從、篇帙失次、属余代為整比、錄目於每冊之首、開櫝展翫、頓還旧觀。因以全帙付之影印。解元常云、

金石之堅、不如紙壽。今冊中諸器物、泰半淪失、滄桑已易、簡冊幸存、後日印本流播、考古家當視為奇宝、而晚霞表章前哲之心、亦可於是徵之矣。闕逢困敦春三月、余杭褚德彝記。



#### 〈訳〉

古器物文字を集めることは宋代から始まり、歐陽脩、薛尚功と継いで、翁方綱が金石款識に励み、畢沅、趙紹祖は共に金石を嗜み、日々考証に専念した。彼等の活躍により、金石学は更に活気に溢れた。乾隆・嘉慶時代には、金石考証学は更に発展を遂げ、学者、文人達は好んで金石を研鑽し、阮元を初め、吳士鑑、陳介祺、後に、張廷済へ受け継がれ、金石研究、三代より秦代以降清代に至までの文物収集、款識に努め、この十冊巨冊を編集した。その内容は、文物についての相違、出所、文字の考証等は、他の金石の著録と違い、跋文は、書苑の青華であり、古林の鴻宝である。

今日、張廷済没後百年が経とうとしている。太平天国の乱の戦火に巻き込まれ、圖書は散佚し、古器物の愛好者は皆、『清儀閣所藏古器物文』を見ることができないのを残念に思っていたが、ある時、古籍収集に励んでいる徐晚霞氏が、上海で『清儀閣所藏古器物



文』十冊を発見した。しかし、冊は人の手を巡って来たため、順番も乱れていたが、私（褚德彝）が、内容を分類・整理し、冊毎に目次を附し、復元影印した。張廷済は、「金石は堅いが、紙の寿命が長いものには及ばない。」と常に言っていた。冊中の文物の大半が、時代の激動と共に散佚したが、幸いにこの冊は残った。後日、この印本が、流伝すれば、考古家達はこれを貴重な著録とし、徐曉霞氏が、張廷済という前哲を顕彰しようとする心もこの書物によって窺うことができる。



この徐曉霞（生卒不明）は、甲子（民国十三年一九二四）三月、序文を書き、翌年（一九二五年）に商務印書館の張元済により初版が出ているので、褚德彝、張元済と親交があったであろう。『清儀閣所藏古器物文』は、張廷済の生きた時代から金石学者に注目されていたが、太平天国の乱で、散逸し、後の約百年後に発見され、再び世に出て、後生の金石学者達の研究史料として役立てられるようになったことが分かる。また、徐曉霞の序文は、次のように記している。



# 〈釈文〉

乾嘉以来、欧趙之学、盛行于時、阮畢翁王著述相望。吾鄉張叔未解元、篤学好古、精于鑑別。金石器物搜藏極富、築清儀閣藏之。顧自庚申亂後、閣燬于火。圖書金石蕩然無存。於是邑人鮑少筠四會嚴根復各得其所藏墨本、影印以伝。然吉光片羽、于簞里收藏、仍未窺其美富也。余好古生晚、於解元書蹟、曾獲一二。而金石墨本、每以未見全豹為憾。丙辰冬、估人以此冊來售、因購得之。凡十巨冊、自金石彝器、泉幣、璽印、輒覽瓦當下至文房玩物、有文字者、無不手拓、萃為一編。解元又各疏其原流、釋其文字、手書其上、實集古之大觀。凡欲考清儀閣收藏者、得此書當不煩他索矣。因以原蹟影印、公之同好、不僅同時收藏家藉此可以考見即叔未解元一生愛古好學之心、亦可共侍于世、洵可與儀徵阮氏、北平翁氏諸書、並為芸林珍重也。甲子三月既望、桐鄉徐鈞曉霞氏叙。



## 〈訳〉

乾隆・嘉慶以来、欧陽修、趙明誠の学問は、時に盛行され、阮元、畢阮、翁方綱、王昶の著述があいついで現れる。我が郷里の張廷済は、篤学で古を好み、鑑別に精しかった。金石器物の収蔵は、極めて富み、清儀閣を築いて之を蔵した。ただ、太平天国の乱後、戦

火で閣は焼失し、図書、金石は跡形も無く失ってしまった。しかし、同郷の人、鮑少筠、四會の嚴根が、各々、その所蔵物の墨本を得て影印して伝えた。だが、吉光片羽で、篋里の収蔵の美富なことを窺えない。私は、古を好み、晩くに生まれ、張廷済の書跡をかつて、一、二点得た。しかし、金石墨本は、未だ全貌を見ないのを残念に思っていた。丙辰の冬、商人がこの冊を

売りに来て買い得た。凡そ十巨冊で、金石、彝器、泉幣、璽印、輶覽、瓦當から下、文房玩物に至るまで、文字のあるものは、手ずから拓を採っていないものは無く、一編を為した。張廷済はまた、各々、その源流を注記し、その文字を訳して手ずからその上に書いている。実に集古の大観である。凡そ、清儀閣の収蔵を考証したいものは、この書を得れば、他を索める煩わしさはない。よって、原蹟を影印し、同好の士に頒つことにした。収蔵家の文書はこれによって考見できるのみならず、張廷済の生涯をかけて古を愛し、学を好んだ心もまた世に伝えることがでよう。誠に、儀徴の阮元と北平の翁方綱の書物とともに芸林の珍重とすべきである。



徐曉霞の序には、徐曉霞と『清儀閣所藏古器物文』

の運命的な出会いと喜びがよく分かる。この著の特徴は、手ずから文物の拓をとり、時代ごとに編集され、その余白に跋を書いているというところである。これは、金石学関係の著作を見ても、大変珍しい編集であり、そこを徐曉霞も評価し、張廷済の金石を愛した心を伝えることができるという喜びが分かる。

次に、跋文を見ていきたい。この跋文は、張元済（一八六七—一九五九）が、金文で書いたものである。張元済は、商務印書館編訳所長として活躍した人物である。手がけた著述も多い。この跋で「吾宗張叔未解元」と記すが、張廷済とは、どのような親類関係にあったのか調べてみたが、今のところ詳しいことは分かっていない。ただ、『張元済年譜』に、「本年（民國十四年 一九二五年）撰《清儀閣所藏古器物文》跋。……」という記事があり、跋を書いたという事実は分かっている。張元済は、張廷済の子孫であることが推測できる。跋文は次のように書かれている。



〈釈文〉

有清之初、吾郡朱竹垞、以經小学昌明于時、鄉賢承風、至乾嘉間、以搜羅金石文字為經小学、集考訂辨證之資、則自吾宗叔未解元始。解元所居、去吾邑不二三



十里。家有清儀閣、所藏古器物文自三代迄清、凡鐘鼎、碑碣、璽印、專瓦、乃至文房玩好之屬、多為歐、趙、洪、婁、王、劉、呂、薛諸家未及者。且諸家每詳于石而略于金、或專于金天而闕于石。閣中所藏、則皆蒐集並存、手自摸拓。疏證翔實、尤出諸家之上。解元為阮文達入室弟子、師資既富。又當時同学、若吳侃叔、朱茱堂、張文漁父子、及其戚串、徐同柏、類皆通金石學、識古文奇字、與之上下議論、互相觀摩、博收約取、積久而取益精、用益宏。清儀閣之著錄、溢乎篋經室矣。夫講求金石之學、浙中最盛、吾郡以文物著稱、甲于浙西。自朱竹垞以經小學開于先而解元又集金石學之大成、精神呵護、終使褒然巨帙、如昭陵繭紙、發見人間、洵希世之珍、照乘連城、未足論也。徐子曉霞獲此重寶、思所以永綿鄉先生之手澤、以為自來金石著錄、皆鈎摸繕寫、棗木傳刻、展轉失真、原拓形神、往々瘳去瘳遠、實為憾事。迺付涵芬樓、為之景印、與墨本不差累黍、出而公諸同好、摩沙方冊、不翅與清儀閣默爾晤對、共敦古懽而曉霞表揚鄉先生之功、抑亦同垂不朽矣。海鹽張元濟。

〈訳〉

清代の初め、私の郡の朱竹垞は、經学小学でその時

に繁栄した。郷土の賢人達はその遺風を受け継ぎ、乾隆、嘉慶の間、金石文字を搜羅することで、經学小学をおさめ、考訂・弁証の資料を収集することは私の先祖の張廷済から始まった。張廷済の住居は、私の郷里から二、三十里程の所にある。自宅には、清儀閣があり、収蔵の古器物文は、三代より清に至まである。凡そ、鐘鼎、碑碣、璽印、專瓦、他に文房玩好の類に至るまで、歐陽修、趙明誠、洪适、婁機、王黼、劉敞、呂大臨、薛尚功の諸家も未だ及ばない所のものである。且つ諸家は、毎に石に詳しくて金に簡略であるが、金を専らにして石を欠いている。清儀閣中の蔵するものは、それらを皆合わせ集めて、手ずから摸拓している。その考証も詳細で、尤も諸家の上に出ている。

張廷済は、阮元の入室の弟子で、師承に恵まれ、又当時の同学、吳侃叔、朱茱堂、張燕昌父子、及びその親戚徐同柏らは、概ね皆金石學に通じ、古文奇字を識別できたので、議論をたたかわせ、互いに觀摩し、広く集めてその中から選び出し、長い時間をかけて、取得したものは、益々精しくなり、用途も益々広くなった。清儀閣の著録は、篋經室に溢れている。

そもそも、金石を研究することは、浙中に最も盛んで、私の郡は文物の収蔵で名をなしている点では、浙

西に冠絶している。朱竹垞が經学小学で先がけをなしてから、張廷済は、又金石学の大成を集めた。神明の呵護によって、褒然たる大著が、昭陵に殉葬された繭紙（蘭亭序）が、再び世に現れたかのようになったのは、誠にまれな奇宝である。徐子曉霞氏は、この重宝を獲て、郷先生（張廷済）の手澤を末永く伝える方法を考えた。元来金石の著録は、双鉤にとつて写した後、版本に彫るが、展転と模刻を繰り返すうちに、真相が失われ、原本の形も神氣も益々かけはなれたものになるのが残念である。そこで、涵芬樓に囑して、これを景印した。墨本と累黍をたがはず出版し、これを同好に公にした。この書物を摩沙すれば、ただ清儀閣と默爾し晤対して共に古歎をあつくするのみならず、曉霞氏の郷先生を顕彰しようとする功積もまた、後世に残不朽のものとなるだろう。



この跋文で注目すべきことは、すべて金文で書かれていたことである。これは、張廷済やこの著に敬意を表しているのだろう。また、現在は数少なくなつてしまったが、世に残る『清儀閣所藏古器物文』は、張元済によつて復刻されたものである。そして、この手槧本が京都大学人文科学研究所に収蔵されている。その

手槧本をもとに復刻版が完成できたのであろう。『清儀閣所藏古器物文』は、戦災で一度散逸したが、金石学者の求めに応じるかのように、徐曉霞が購入し、褚德彝によつて分類、整理がやり直され、張元済によつて復刻されたという経緯が分かるだろう。

## 五. 古甌について

ここまで、張廷済の金石学、古甌研究について交友や『清儀閣所藏古器物文』の序跋から考察してきた。より具体的に後に述べたいが、ここで、古甌とは、いかなるものかを明らかにしたい。近年、漢代の古甌の書法についての研究著書として、黄惇著『秦漢魏晋南北朝書法史』（江蘇美術出版社・二〇〇九年二月）が出版された。この著の「第四章漢代の磚瓦銘文 第二節漢磚銘文」には、古甌は、六種の甌文の内容によつて分類できるということが述べられている。その内容を取り上げ少し考察も加えていきたい。

### ①制磚の地名、人名と管轄の役所名

戦国、秦代の製陶工芸の習慣を受け継ぎ、多くは、印章を磚面に押している。その後は、民間の製磚業に発展し、磚文にはしだいに墓主人の姓名に替わった。この種の印記は、もとは労働上の工具であり、印陶の

痕跡は、封泥に似て、璽印の一つの分派であるといえる。

## ②製磚工が用いた建築上の標記

これは主として、数目、建築に使用した方位や寸法等を記したものである。多くは硬い工具等で磚上に刻している。大量生産時は、印章で記号を表し、また、建築工程の必要に応じて毛筆で磚上に墨書したものが多い。

## ③年号と記事

漢代の陵墓と民間の墓葬中には、建造年月日を記した磚が多い。造墓時間の記録を型押しした磚や巨額の資金を投じて建設した史記を記録したものもある。

## ④吉語・吉祥祈禱の語

初めは、前漢の宮殿、官署、建物の地面に敷かれた磚上に現れた。装飾趣味に富み、華やかな宮廷の色彩美を表現している。後漢には、厚葬の習慣が民間に広まり、吉語を銘した小さな墓磚が大量に出土した。図案や花紋が相互に映え、特有の装飾美を表現した。

## ⑤墓志

漢代の墓志はまだ、生成期にあり、雛形で典型的な墓志には、洛陽の刑徒墓磚がある。秦代の葬瓦に似て、刑徒の刑名、姓名、出身地、没年等が記されている。

## ⑥その他

漢代の磚銘中、数は少ないが、「買地券」がある。これは、地契の随葬品である。銘文には、死者の姓名、死亡年月、土地売買の由来、大小、範圍、値段、価値、証人等が記録されている。漢代の地券には、鉛の板に刻したものが多く、墓主の事跡、製磚工、製造地と関係のない銘文もある。伝世の「急就奇觚」磚、「公羊伝」磚は、民間の工匠が、労働の余暇に刻したもので、文墨に通じた人になるものとして、注目される。書され、刻されたものとして注目されている。

## ①型押し磚銘

漢代の磚銘中では、型押しするのが最も多い。それは、建物と陵墓に磚を使用するときに、大量生産できるからである。型を作って、型押し、焙焼し、製造され、主として、建築装飾用に使われた。磚銘の多くは陽刻で、陰刻は少ない。前漢の型押し磚文には、宮殿

の地面に敷いた磚上に見られる。

## ②刻画磚銘

漢代の刻画磚銘は、全て陰刻であり、直接に刻画し、簡牘木簡の書法に似て、自由な書きぶりを窺うことができる。

黄氏が漢代の磚銘について述べたことは、魏晉南北朝の磚にもほぼ同じことがいえよう。時代が遡ると、年号や製磚者等を刻したものが多くなる。張廷済も、漢代から魏晉南北朝時代の古甁も多く所蔵しており、それらの時代や年号や出所等を考証し、その書体についても考察している。これらのことを、念頭に置いて、張廷済の古甁研究はいかなるものであったか、以下考察をする。

## 六・『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古甁）に ついて―記載内容の分類―

張廷済の古甁研究の具体的な内容は、『清儀閣所蔵古器物文』第五冊（古甁）で分かる。そこには、彼の独特の視線も窺うことができ、金石の著録として珍しいものになっている。学術的考証のみならず、古甁をめぐる様々な事柄、交友関係等も窺うことができる。それは、次の九種にまとめることができる。この中から、主要な内容を取り上げ考

察したい。

- (1) 年号を考証して歴史へ懐いを馳せる。
- (2) 古甁の発見と入手の経緯
- (3) 作硯（古甁を用いて硯に作ること、作硯に関する記述）

- (4) 名家（翁方綱、阮元、達受等）との交流の記録
- (5) 友人（呉東発、梁同書等）からの書簡
- (6) 文字、時代、出所、甁質等の考証
- (7) 友人の略伝
- (8) 旅先で書いた記録
- (9) 独白・手記等

(1) 年号を考証して歴史へ懐いを馳せる。

道光十一年辛卯（一八三二）四月二十五日 晋建興甁  
建興四年、歳在丙子、十一月愍帝蒙塵、次年三月、宣帝孫  
睿、即晋王位、於建興為元帝建武元年、此十月、所作之甁。  
是西晋垂尽之物。

道光十一年辛卯四月二十五日叙末張廷済。

道光十一年辛卯（一八三二）四月二十五日 晋建興甁  
建興四年、歳丙子に在り、十一月愍帝蒙塵し、次の年

三月、宣帝の孫睿、晋王の位に即し、建興に於いて、元帝の建武元年と為す。此十月、作る所之軋なり。是西晋の垂尽之物なり。

道光十一年辛卯四月二十五日叔未張廷濟。

張廷濟が、年号の考証をする中で、中国史上の大事件に懐いを馳せている記事である。建興四年（三一六）歳は丙子にあり、十一月愍帝が逃げ出し、宣帝孫睿が晋王に即位し、元帝となった。この軋は、建武元年（三一七）十月に作られた軋。これは、やがて、崩壊する時期のものである。

## （2）古軋の発見と入手の経緯

道光十一年辛卯（一八三六）四月二十四日 晋永嘉二年軋  
永嘉二年九月残軋。海塩出土。友人携来。換書者。質極堅、案晋懷帝二年歳在戊辰、是年十月漢王劉淵称帝。

道光十一年辛卯（一八三六）四月二十四日 晋永嘉二年軋

永嘉二年九月残軋。海塩の出土。友人携え来たる。書と交換す者なり。質は極めて堅し。案ずるに、晋の懷帝二年歳は戊辰にあり。この年十月、漢王劉淵帝と

称せり。

永嘉二年は、劉淵が反乱を起こして帝となる、中国史上の転機に思いを馳せている。また、友人が携えて来てくれたこの軋と自作の書とを交換している。

## （3）作硯（古軋を用いて硯に作る）こと、作硯に関する記述

道光十一年辛卯（一八三一）四月二十五日 晋建興軋  
海塩出土、書蹟致佳。友人携来。易書者。去年夏、金陵匠沈琢山作為研。

道光十一年辛卯四月二十五日叔未張廷濟。

道光十一年辛卯（一八三一）四月二十五日 晋建興軋  
海塩の出土。書蹟は甚だ佳い。友人が携え来たる。書と易うる者なり。去年の夏（道光十年庚寅一八三〇）、金陵（南京）の匠沈琢山作りて、硯と為す。

友人が持ってきた軋を自作の書と交換するところは、入手の経緯として大変人間味に溢れて面白い。彼は、程よい硬さ・質感の軋は、硯にしている。加工は、職

人に任せており、沈琢山や胡琢によく作硯してもらっている。

(4) 名家（翁方綱、阮元、達受等）との交流の記録

一・嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋元康二年

反文甌、附沈戴份札

〈硯銘〉西晋甌元康二作研田。藏書筭湖海盟『金石契』永宝之。張叔未。方綱。

西晋甌元康の二、研田を作る。書筭湖海盟の『金石契』に之を永宝と蔵す。張叔未。方綱。

これは、翁方綱が張廷済のために書いた跋である。張廷済が、跋を甌に刻した。

二・嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋元康二年

反文甌、附沈戴份札

晋懷帝永嘉二年歲在戊辰。此甌海塩出土。其色紅。堅如玉、朱月樵碾作半月研、售歸於余。昔年、李一徵携携一品来。文曰、晋咸和二年。吾弟季勤見而得之己巳之夏、翁覃溪學士為作銘云、張君之研、晋之甌。相去一千五百

四十有四年。咸和四年、是戊字、聞諸我友秀水錢張君、此研又在其二載前云々。此晋二年三字、与季勤所得者同一精好。如出一手、且在成帝咸和二年丁亥前二十載。尤可宝也。

晋懷帝永嘉二年歲は戊辰にあり。この甌は海塩の出土。その色は紅。玉の如きこと堅し。朱月樵碾して半月研に作り、皆余に歸す。昔年、李一徵携携一品を携え来たり。文に曰く、「晋咸和二年」なり。吾弟の季勤見て之を得たり。己巳の夏（一八〇九）翁覃溪學士銘を作りて為して云く、張君の研、晋の甌なり。相去ること一千五百四十有四年。咸和四年は、戊の年なり。諸我友秀水の錢張君に聞けば、此の研は又其二年前に在り云々。此の晋二年の三字は、季勤と得る所の者と同一に精好。一手に出る如し、且つ成帝の咸和二年丁亥の二十年前に在り。尤も宝とすべきなり。

紅色の美しい甌で、朱月樵が半月研に作り、売りに来て入手した。朱月樵は、詳しい伝記はないが、張廷済に度々甌を売りに来る人物である。張廷済が、甌を硯にする趣味を知っているのです、この時は、硯に加工して売りに来たのである。また、李一徵携携という人が、



一品を携えて来て、弟の張沆が得た。翁方綱が作った銘文も刻されている。張廷濟・張氏一族が、翁方綱と文物を通して、親しく交流していたことが分かる。また、友人の錢張氏に文字について質問している。この人物も、伝記資料がないが、張廷濟と親しくして、金石を嗜んだ人に違いない。

三・嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋元康二年反文甌、附沈戴份札

#### 〈追記〉

二十三年癸卯四月十一日。以此甌奉儀徵相公阮夫子。

#### 〈追記〉

道光二十三年癸卯（一八四三）四月十一日。この甌を儀徵相公阮夫子（阮元）に奉ず。

これは、成帝咸和二年以前の二〇載あるうちの一つ、晋懷帝永嘉二年の大変珍しく美しい甌なので、阮元に献上した。張廷濟と阮元の交流は、密なものであった。この記事で注目するべきは、翁方綱と阮元との交流と、入手時に関わった人と経緯。錢張や李一徵聘等の

人との関わりである。

（5）友人（吳東発、梁同書等）からの書簡

嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋元康二年反文甌、附沈戴份札

#### 〈書簡〉

昨日午後、接奉硯銘一箇、即于昨晚刻起、今日午刻已告竣矣。茲特奉上、仰祈檢収、承惠大作一篇、暨汪雲壑先生時文一篇、俱已錄出、謹此奉還、謝謝。余容面稟、肅此敬請珍安、不一。叔未表叔老夫子大人尊前。受業表姪沈戴份頓首。二十五日未刻。

昨日の午後、硯銘を頂き、昨晚から刻しはじめ、今日の午後に完成しました。どうか、御調べの上お収め下さい。大作一篇と汪雲壑先生の文一篇をお借りしておりましたが、既に録出しました。謹んでこれを奉還致します。ありがとうございます。また、ぜひご面会したいです。ここに謹んで報告致し、ご健康をお祈りいたします。※手紙文として口語訳に改めた。

これは、沈戴份が張廷濟に宛てた手紙である。この沈氏が、今回の硯銘を刻したのである。手紙は、出来

上がった硯に添えたものである。

(6) 友人の略伝

嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋永康二年反文  
軹、附沈戴份札

海塩海沙場郭紳垂茂才丹墀所貽、郭為吳蘭陔師女之子  
聰穎絶倫、乾隆乙酉、余同学于敢浦「八銘書樓」、補  
学官弟子、後家日落、嘉慶癸亥失母、甲子喪偶、未幾  
溺死、上有老父、下遺二孤、文人奇厄、可勝痛悼、乙  
丑十月二十五日。

自吳興赴省、行次南雙林倚篷書此、彌深故人之感、晋  
惠帝永平元年六月改元康元年、此二年歲在壬子。道光  
二年壬午七月二十三日再録。叔未張廷濟。

これは、郭丹墀の略伝を書いたものである。この人  
物は、史伝に見えず、郭氏を知るにあたり、大変貴重な  
資料となる。海塩の海沙場の郭丹墀が贈ってくれた  
軹。郭氏は、吳蘭陔先生の娘の子で、ずば抜けて賢い  
人であった。乾隆乙酉（一七六五）、張廷濟は、共に、  
敢浦の「八銘書樓」で研鑽した。郭氏は、学官弟子に  
任命された。後に、家は日々没落し、嘉慶癸亥（一八  
〇三）母を亡くし、甲子（一八〇四）には妻を亡くし

た。まだ、幾ばくも経っていないのに彼は、溺死して  
しまった。上には老父が居て、下には、遺族の子二人  
がいる。文人の災難は、痛悼にたえない。乙丑（一八  
〇五）十月二十五日。今は亡き、友人の不幸を気の毒  
に思つて、ここに書き残したのだ。張廷濟の心の温か  
さを感じる。

また、旅先で、亡くなった友人の事を思い出し、友  
人が贈ってくれた軹について書くと共に、吳興から省  
に赴き 途中、南雙の林倚篷に宿り、これを書いた。  
いよいよ亡き人への思いは深くなった。晋惠帝永平元  
年六月、元康元年に改められた。この二年、歳は壬子  
（二九二）にあり。道光二年壬午（一八二二）七月二  
十三日に再録されている。※詳細な交友関係を述べた  
ので、説明文で記す。

二、嘉慶十年乙丑（一八〇五）十月二十五日 晋永康二年  
反文軹、附沈戴份札

〈沈戴份略伝〉

元康二年軹研銘、昔年己巳、翁閣学為余書丹。刻者為  
東隣沈質君表姪沈向学。善篆刻、又不永其年、存此小  
札、并識之。以冀永伝。叔未張廷濟。

元康二年甄研銘、昔年己巳（嘉慶一四年 1809）、翁方綱が余の為に書丹せり。刻者は、東隣の沈質君表姪沈向学為り。篆刻を善くし、又其年永らえず。此の小札を存して、并に之を識す。永く伝わらんことを冀う。

今は、亡くなってしまった。沈氏を悼んで、手紙と共に彼のことを後世に伝えるため、略伝と共に記録した。このことから、『清儀閣所藏古器物文』は、後世に残すために、書かれたものと分かる。

## （7）独白・手記等

道光四年甲申（一八二四）一月十九日 潘儒南残甄・吳侃叔积文

乾隆六十年乙卯四月十三日、余於海塩漁舍、得晋太康五年郭家葬甄・蜀師甄。越一日、又得漢永寧元年甄。是為得古甄之始。徳容兄得此甄、在四月之末、今兄去世已十六年矣。对此不勝感愴。甲申正月十九日清晨。廷済又記。

ここで、重要なのは、この日の甄収集が、張廷済の古甄収集を始めたきっかけであったことだ。乾隆六十

年（一七九五）乙卯四月十三日に、彼は、海塩の漁師の小屋に訪れ、「晋の太康五年郭家葬甄と蜀師甄」を手に入れた。一日おいて、「漢の永寧元年甄」も手に入れた。これから、古甄収集を始めたのだ。兄の張徳容もこの甄を得た。二人で良いものが手に入ったと、喜んでゐる姿が目に見えようである。しかし、この年の四月末に、兄が亡くなり、もう一六年が経った。当時兄と二人で手に入れた甄を眺め、当時の事、兄と過ごした日々を思い出して、涙が出るぐらいの悲しみが込み上げてきたのである。人間味あふれる、心温かなエピソードである。※張廷済の古甄収集のきっかけを重視し述べたいので、説明文で記す。

## 八．おわりに

『清儀閣所藏古器物文』第五冊（古甄）が、張廷済の人生をかけての金石学、また、金石趣味を伝える、非常に貴重な記録となっている。前にも述べたが、これは、彼の金石日記であると考えられる。他の著録にはない、人間味、心の温かさ、文物収集の楽しさ、人との関わりの喜び等多くのことを学びとれる。また、この面白さは、人物がたくさん紹介され、その人たちとの楽しい交流生活が、生き生きと記録されていて、人生ドラマさえも読み取ることができる。

多様で新しい金石の著録の書き方は、彼以後、多くの金石学者に影響を及ぼした。例えば、『窓斎集古録』呉大徵著『鮑小筠所藏金石文字』鮑小筠輯、『敬吾心室彝器款識』朱善旂輯、『簠齋伝古別録手稿』陳介祺撰、『高昌專録』羅振玉撰等がある。

これらの金石学者たちに、張廷済は、金石趣味、金石日記など、金石学の新風を巻き起こしたのだった。このような、文人達が残した著録は、この『清儀閣所藏古器物文』に做ったものである。それらの著録も、今後も研究し、張廷済の金石学、古甌研究は、後生の金石学者達にどのような影響を与えたかを考察していきたい。

#### 参考文献

##### 《根本資料》

『清儀閣所藏古器物文』十冊 清・張廷済撰

民国十四年 上海商務印書館 桐郷徐氏愛日館藏本景印

##### 《伝記資料》

『清代画史増編』三十七卷・補録一卷 盛薰輯

民国十六年 有正書局

『清画家詩史』二十卷 李潜之輯 民国十九年 寧津李氏刊本

『甌鉢羅室書画過目考』四卷附一卷 清・李玉棻撰

光緒二十三年男元振刊本

『清代名人尺牘集小伝』二十四卷

清・吳修撰

『清代僕学大師列伝』二十五卷叙伝一卷 支偉成撰

民国十四年 上海泰東書局排印十七年再版本

『金石学家列伝』

『清代学者象伝』第一集四冊 葉恭綽輯

『清儒学案小伝』二百八卷 徐世昌撰 民国十九年 上海商務印書館景印本

『清朝書人輯略』十一卷首一卷 清・震鈞撰 光緒三十四年 金陵刊本

『書林藻鑑』十二卷索引一卷 馬宗霍撰

『皇清書史』三十二卷首一卷末一卷附録一卷増皇清書人別号録一卷 清・李放撰 号録・葉眉撰

『清史稿』中華書局本 民国二十五年 上海商務印書館

『清史列伝』八十卷 清・闕名輯

『新編金石学録』松丸道雄編 昭和五十一年九月発行 汲古書院

『中国書道辞典』中西慶爾編 一九八一年一月二十日 木耳社

《その他の資料》

『徐籀莊手写清儀閣古印考釋』徐同柏著

（出版社・刊行年不明のため、跋から道光十八年戊戌（一八三八年）一月一七日刊とする。）

『清儀閣藏名人遺印』徐同柏主題・褚德彝著

甲寅（咸豐四年 一八五四年）閏五月刊

『張元濟年譜』張樹年主編 柳和城、張人鳳、陳夢熊編著

一九九一年十二月第一版・北京第一次刷 商務印書館

『恽齋集古錄』第一冊 吳大澂著

『太平寺史話』一卷 鮑翔麟編 著嘉興市南湖区政協文史委員會

二〇〇八年九月

『秦漢魏晉南北朝書法史』黃惇著 江蘇美術出版社・二〇〇九年二月